接尾辞 -lich をもつ派生語に現れる歯茎破裂音挿入の起源について

久保さやか

1. はじめに

現代ドイツ語において，接尾辞 -lich によって形成される派生語には，(1)（括弧内は語の構成）に挙げる語[1]のように，語源とは全く関係のない歯茎音［t］が挿入されているものが多い。

(1) ‚eigentlich‘ (‚eigen‘＋-lich)
‚hoffentlich‘ (‚hoffen‘＋-lich)
‚namentlich‘ (‚Namen‘＋-lich)
‚öffentlich‘ (‚offen‘＋-lich)
‚wesentlich‘ (‚Wesen‘＋-lich)
‚wöchentlich‘ (‚Wochen‘＋-lich)

この挿入音は，わたり音ないしは萌芽子音と呼ばれ，一般的に，特定の子音連続において先行の子音から後続の子音への調音が移行する際に生じる音と見なされている。この場合の特定の子音連続は，萌芽子音［t］の前後にある鼻音［n］と側面音［l］ということになるが，必ずしも全ての，［n］＋［l］の子音連続を持つ -lich 形容詞に挿入現象が見られるわけではない。例えば (2) に挙げる語に萌芽子音は現れていない。

(2) ‚erstaunlich‘ (‚erstaun(en)‘＋-lich)
‚gewöhnlich‘ (‚gewöhn‘＋-lich)
‚männlich‘ (‚Mann‘＋-lich)
‚persönlich‘ (‚Person‘＋-lich)
‚verbrenlich‘ (‚verbren(nen)‘＋-lich)

(1) と (2) の語群を比べると，(1) は接尾辞 -lich の直前の音節には強勢がない語であり，(2)

1) Mater, Erich (1965): Rückläufiges Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig: Bibliographisches Institut より採集。(2) の例も同様。

は直前の音節に強勢を持つ語であることが分かる[2]。つまり，[n] と [l] が隣接するという同じ条件があっても，その [n] が強勢のない弱音節に属する場合は歯茎音 [t] の挿入が生じ，逆に [n] を含む音節が強勢を持っていると挿入は起きない。このことから，この子音挿入は，単に鼻音と側面音の連続に要因があるだけではなく，アクセントの位置が何らかの形で深く関わっていることが予想される。しかしまた同時に，音韻的ではない原因，形態上の二次的な類推が作用していることも考える必要がある。本稿は，鼻音 [n] と接尾辞 -lich の間で挿入現象が生じた原因について，発生当時の音韻的背景を手がかりに論じるものである。

2. 初期新高ドイツ語における -lich 派生語と歯茎破裂音の挿入

歯茎破裂音挿入の見られる語，例えば ‚eigentlich' や ‚hoffentlich' は，中高ドイツ語においては ‚eigenlich' や ‚hoffenlich'[3] のような挿入のない形で現れることから，この挿入はそれ以降の，つまり初期新高ドイツ語から現代までのうちに生じた現象であると推測できる。では初期新高ドイツ語の時代にどのような形で現れたのだろうか。またその際，現代ドイツ語では挿入の現われない，強勢音節末の [n] の直後に接尾辞 -lich が続く語群にもやはり同様に挿入は生じないままであったのだろうか。

2.1. 中部ドイツ語と上部ドイツ語

Virgil Moser (1951)[4] によると，このような弱音節の -en と接尾辞の -lich 間の歯茎破裂音の挿入は，すでに後期中高ドイツ語の時代から時折現れ，14，15 世紀に増加した。また V. Moser の記述で最も注目すべきなのは，この弱音節が先行する位置への歯茎破裂音 [t] の挿入は中部ドイツ語が発生源であるのに対し，その一方で，ほぼ同時期に，上部ドイツ語では強勢のある音節末の鼻音 〈n〉 と 〈l〉 の間で歯茎破裂音 〈d〉 が挿入される[5] ことが頻繁に起こり，その中でも -lich 派生語における挿入はバイエルン方言に限定されている。すなわち，大きく分けて，中部ドイツ語と上部ドイツ語では，様々な点で対を成す挿入現象が同時期に発生した。中部ドイツ語では弱音節の直後に，無声音を示す 〈t〉 が，上部ドイツ語では強勢のある音節の直後で，有声音を示す 〈d〉 がそれぞれ萌芽していて，さらに現代にまで残されたのは中部ドイツ語での発達のみである。このような相違点があるという

---

2) ‚kenntlich' は例外的に強勢音節と -lich の間の [t] の挿入例のようであるが，名詞 ‚Kenntnis' に対する類推も考えられる。また一見〈d〉の挿入のように見える ‚morgendlich' は，恐らく形容詞 ‚morgend'から派生。

3) 以下，中高ドイツ語における単語は代表形として男性単数主格形を挙げる。Lexer, Matthias (1872-1878): Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. Bd. I-III. Leipzig: S. Hirzel を参照。

4) Moser, Virgil (1951): Frühneuhochdeutsche Grammatik. Band I: Lautlehre, Teil 3: Konsonanten, 2.Hälfte. Heidelberg: Carl Winter.

5) -lich の他，-lein と -el などの接尾辞が付く派生語に見られる。-lein と -el 派生語の例については本論の 3. 3. 節の (18)，(19) を見よ。

ことは，両方の地域方言において強勢の位置と子音挿入の関係か，あるいはそれ以外の要因が異なって作用していることを示唆している。

そこで，[n]＋-lich の連続を形成する派生語は，初期新高ドイツ語の時代に，中部ドイツ語と上部ドイツ語とでどのような現われ方をしているか，いくつか実例を挙げて観察してみよう。ここでは Kettmann の選抜による初期新高ドイツ語のテクスト[6]のうち，書かれた場所別に集められた公文書や私信等を利用して，-lich 派生語で〈n〉と〈l〉の子音連続を形成する語を挙げる。また必要に応じてその他のテクストも参照する。ただしその際，中部ドイツ語と上部ドイツ語とにおいて異なった挿入現象を生み出すにいたった音韻的な背景を調べるため，それらが現れ始める 14，15 世紀のテクストを対象とし，また韻律的に操作される可能性の少ない散文形式のものを主に取り扱う。

2.2. 中部ドイツ語

弱音節の -en と -lich 接尾辞の間に〈t〉が現れ始めたのは後期中高ドイツ語の中部ドイツ語であるが，Kettmann のテクストから調べた限りでは，14 世紀のものに挿入の現れた語は例証されず，15 世紀のものに〈t〉の挿入が認められた[7]。また，強勢音節末の〈n〉と接尾辞 -lich との間に挿入は生じていない。

西中部ドイツ[8]：強勢のある音節の〈n〉と -lich が隣接する語は (3) に挙げるものが見つかった。いずれも歯茎破裂音の挿入は生じていない。弱音節 -en と接尾辞 -lich が隣接する語については，(4) の，15 世紀のテクストからの一例しか該当しなかったが，やはり〈t〉の挿入が見られる。

(3)	〈gemeynligin, gemeynlichen, gemeynlich〉	(＜mhd. ‚gemeinlich‘)
	〈allermenlichen, menlich〉	(＜mhd. ‚menlich‘)
(4)	〈vffintliche〉	(＜mhd. ‚offenlich‘)

東中部ドイツ[9]：西中部ドイツにおけるテクストの場合と同様に，強勢音節末の〈n〉と -lich の間の挿入は観察されない (5)。弱音節に -lich が後続して形成される語については，(6) のように〈t〉の挿入されているもの[10]と，(7) のように挿入のされていないものの両方が確

6) Kettmann, Gerhard (1971): Frühneuhochdeutsche Texte. Leipzig: VEB Bibliographisches Institut.
7) 14，15 世紀の，調べた限りのテクストからは確認されなかったが，V. Moser によれば，挿入子音として有声音を示す〈d〉も後に稀に出現するようになる。
8) Kettmann (S. 56-72).
9) Kettmann (S. 73-146).
10) Mattheier にライン・フランケン方言のテクストからの〈offenklich〉と〈eigenklich〉が取り上

認された。しかし，挿入のない語はいずれも 14 世紀のもので，挿入のあるものは 15 世紀のものである。

(5)	⟨gemeynlichen⟩	(＜mhd. ‚gemeinlich‘)
	⟨gewonlich⟩	(＜mhd. ‚gewonlich‘)
(6)	⟨eigintlichin⟩	(＜mhd. ‚eigenlich‘)
	⟨wissentlich, wissintlich⟩	(＜mhd. ‚wiȝȝenlich‘)
(7)	⟨offenlich*e*n[11]), vffenlichen⟩	(＜mhd. ‚offenlich‘)
	⟨furstenlich*e*n⟩	(＜mhd. ‚vürstenlich‘)

2. 3. 上部ドイツ語

V. Moser によると，上部ドイツ語では，中部ドイツ語とは逆に，強勢音節末の ⟨n⟩ と ⟨l⟩ との間に，しかも多くの場合，有声を示す ⟨d⟩ が現れる。ただし -lich 派生語における挿入はバイエルン方言に限られているので，それ以外の地方のテクスト[12] では，(8) のように，語において強勢音節と -lich が連続していても挿入は生じていない。また，(9) の例のように，弱音節の ⟨-en⟩ と -lich の間にもやはり歯茎破裂音の挿入は見られなかった。

(8)	⟨gemainlich, gemainlichen, gemeinlich⟩	(＜mhd. ‚gemeinlich‘)
(9)	⟨offenliche, offenlichen, offenlich⟩	(＜mhd. ‚offenlich‘)
	⟨bescheidenlich⟩	(＜mhd. ‚bescheidenlich‘)

げられている。一見歯茎音ではなく喉音 ⟨k⟩ の挿入のように見えるが，Mattheier はこの ⟨k⟩ を軟口蓋鼻音への同化を表す例として挙げている。つまり ⟨nk⟩ で一つの軟口蓋鼻音を表すので，挿入とは見なされない。恐らく軟口蓋音化は後続の高舌母音 ⟨i⟩ によって引き起こされたもの。(Mattheier, Klaus J. (1993): Proto-Orthographie. Überlegungen zum Verhältnis von Schriftzeichen und Lauten anhand von rheinfränkischen Texten. In: Mattheier, Klaus J. / Nitta, Haruo / Ono, Mitsuyo (Hrsg.) Methoden zur Erforschung des Frühneuhochdeutschen. S. 17-32. München: iudicium.)

11) 語中の斜字体は Kettmann での表記をそのまま写したもの。以下も同様。横線ないしは波形符のついた ⟨n⟩ を書き直したものと思われる。調べた限りでは，接尾辞 -lich の前の弱音節 -en にこの斜字体が用いられることはない。もしこのような表記が，弱音節の母音の消失に伴う鼻音の成節化 (つまり母音化) を表すものと仮定すると，接尾辞 -lich の前では，絶対的な語末とは異なって，閉音節の状態が保たれると推測できる。しかしこれは今のところ中部ドイツ語と上部ドイツ語の両方に同様に見られるので，両者における挿入の違いの原因を探る手がかりとはしがたい。

12) Kettmann (S. 31-47).

〈vnuerbrõchenliche〉 (＜mhd. ‚unverbrochenlich‘)
〈aigenlichen〉 (＜mhd. ‚eigenlich‘)

バイエルン方言[13]：Kettmann のバイエルン方言の 14・15 世紀のテクストからは，強勢音節と -lich の隣接する語は例証されなかった。弱音節 -en と -lich が隣接するものは 15 世紀のテクストから (10) の 2 例があり，中部ドイツ語の影響から〈t〉の挿入が観察される。

(10) 〈eygenntlich〉 (＜mhd. ‚eigenlich‘)
〈wissentlich〉 (＜mhd. ‚wiȝȝenlich‘)

その他の，14・15 世紀のバイエルン方言のテクストを調べると，中部バイエルン方言のもの[14]から強勢音節と接尾辞 -lich 間の〈d〉の挿入の生じている語がいくつか見つかった。

(11) 〈gewondleich,
ungewõndleiche〉 (＜mhd. ‚gewonlich‘)
〈gemainchleich〉 (＜mhd. ‚gemeinlich‘)
(12) 〈ungwãndleich〉 (＜mhd. ‚ungewonlich‘)
(13) 〈gemainchleich,
gemainchleichn〉 (＜mhd. ‚gemeinlich‘)
〈ungewõndlich〉 (＜mhd. ‚ungewonlich‘)

これらの例を見て分かるとおり，語彙は中高ドイツ語の ‚gemeinlich‘ と ‚(un-) gewonlich‘ に相当するものの 2 種類しか確認されなかったが，‚(un-)gewonlich‘ に相当する語には〈d〉が現れ，‚gemeinlich‘ に相当する語には全て，歯茎破裂音ではなく〈ch〉が挿入されている。語彙の種類が少ないため断定し難いが，恐らく先行音節の母音の，調音時の舌の状態が影響してそのような違いを引き起こしていると思われる。‚gemeinlich‘ 相当語の語根における〈i〉が挿入子音に軟口蓋音化をもたらしているのであろう。

13) Kettmann (S. 22-30).
14) (11) の例は Heinrich von Langenstein, Erchantnuzz der Sund. Nach österreichischen Handschriften hrsg. v. Rainer Rudolf. (= Texte des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit. Heft 22) 1969. Berlin: Erich Schmidt. (12) の例は Konrads Büchlein von der geistlichen Gemahelschaft. Untersuchungen und Text v. Ulrich Schülke. (= Münchener Texte und Untersuchungen zur deutschen Literatur des Mittelalaters. [MTU] 31) 1970. München: C. H. Beck. (13) の例は Konrad Steckels deutsche Übertragung der Reise nach China des Odorico De Pordenone. Hrsg. v. Gilbert Strasmann. (= Texte des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit. Heft 20) 1968. Berlin: Erich Schmidt より。

上述のような，強勢音節と -lich 間の〈d〉の挿入が観察されたのは中部バイエルン方言のみで，北バイエルン方言[15] と南バイエルン方言[16] には，それぞれ (14)，(15) に挙げたような挿入のない語しか見られなかった。

(14)	〈synlich〉	(＜mhd. ‚sinnelich‘)
	〈verdienlicher〉	(＜mhd. ‚verdienlich‘)
(15)	〈manleich〉	(＜mhd. ‚manlich‘)
	〈senleich〉	(＜mhd. ‚senlich‘)

3．中部ドイツ語の〈t〉挿入と上部ドイツ語の〈d〉挿入

さて，この二つの現象は，アクセント構造の環境が異なってはいるものの，主な要因である子音連続は共通しているので，同様の音韻的原因ないしはプロセスから生じる歯茎破裂音の挿入と見なしてよいのだろうか。

3．1．[n]＋[l] 子音連続と歯茎破裂音の挿入

まず，ここで問題になっている [n]＋[l] 子音連続間の歯茎破裂音の挿入という現象がどういった原因・過程で生じるものであるのかを明白にしておく必要があろう。

先にも述べた通り，子音の挿入現象は特定の子音連続において生じる。この場合の鼻音 [n] と側面音 [l] の子音連続も子音挿入を引き起こしやすい。Russ (1982: S. 39)[17] は ‚eigentlich‘ や ‚hoffentlich‘ などの語における [n]＋[l] 間の [t] の挿入の原因について次のように述べている：

---

15) ‚Die Tafel der christlichen Weisheit‘. In: P. Egino Weidenhiller (Hrsg.). Untersuchungen zur deutschsprachigen katechetischen Literatur des späten Mittelalters. S. 83-101. (= MTU 10) 1965. München: C. H. Beck. その他，北バイエルン方言のテクストとして Eine gute peicht. In: ebd., S. 52-82. Die ‚Unterweisung der Laien‘. In: ebd., S. 153-162. Das Arzneibuch des Erhart Hesel. Hrsg. u. eingel. v. Bernhard Dietrich Haage. (= Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 88) 1972. Göppingen: Alfred Kümmerle の 3 つを調べたが，強勢音節末の〈n〉と〈l〉の子音連続を形成する語は例証されなかった。しかしそれらのテクストにおいても弱音節の〈-en〉と -lich が隣接する語は比較的頻繁に現れているので，後者の語彙に対して前者の，強勢音節の先行する場合の語彙は頻度の低いものであることが分かる。

16) Hugo von Montfort. II. Die Texte und Melodien der Heidelberger Handschrift cpg 329. Transkription von Franz V. Spechtler. (= Litterae 57) 1978. Göppingen: Kümmerle. (15) の例の他に〈fronleichnam〉(＜mhd. ‚vrônlichname‘) という合成語もあるが，同様にやはり子音挿入は現れていない。また南バイエルン方言として Heinrich Haller, Übersetzungen im „gemeinen Deutsch“ (1464). Erika Bauer (Hrsg.). (= Litterae 22) 1972. Göppingen: Alfred Kümmerle. も調べたが，これもまた強勢音節末の〈n〉と〈l〉の子音連続を形成する語は例証されなかった。

17) Russ, Charles V. J. (1982): Studies in Historical German Phonology (= European university studies 616). Bern: Peter Lang.

主な条件的要因は [n] から [l] への移行にあるようだ。[t] の語中音添加は鼻音から側面音への移行を簡単にするものである。鼻腔への通路を閉じるとき，舌の形が側面音の発音のものになる前に口腔歯茎破裂音が生産される。

つまり，鼻音 [n] を発音し終え，舌の形を [l] の側面音の状態にする前に，気流を鼻腔から口腔に切り替えてしまうので歯茎破裂音が生ずるということである。この説明では幾分か発音の経済性をねらった表現がされているが，単に現象の過程そのものをもう少し詳しく言うと，鼻音 [n] のための調音点の閉鎖時は気流は鼻腔を流れているが，次の側面音 [l] の口腔気流の性質が早くに入り込み，[n] の調音点の解放は口腔気流でもって行われる。すなわち，[n] は解放時にはすでに鼻音としてではなく，口腔気流の破裂音 [d] として現れる。「挿入」子音とは言うが，発生時は一つの閉鎖音の後半である解放部が別の音に変化してできた子音で，それが後に余剰的な一つの音韻の添加として認識されていったのだろう。ただし，この [n] と [l] の間には解放を許すだけの隙間がなくてはならない。もしここで隙間がなければ挿入は生じないか，[l] が [n] に同化し [d] となるであろう。また後者の場合であってももちろん挿入としては認められない。挿入現象が生じるか否かは，すなわち，このような隙間を持つ音節構造が根底にあるかないかによって左右されると思われる。

3.2. 中部ドイツ語と上部ドイツ語の音節構造

さて，上述の，挿入を許す音節構造は，中部ドイツ語と上部ドイツ語の差異として，つまり，中部ドイツ語では弱音節と側面音の間に，上部ドイツ語では強勢音節と側面音の間に挿入分の余地があるということは，表記上に何らかの形で確認される可能性もあるが，第2章で扱った14, 15世紀の -lich の派生語を調べた限りでは，両者の音節構造には特に目立った相違点はなかった。それどころか，文字上では，両者間で全くの同形を示す語も存在している。以下に，任意に14世紀の例をいくつか挙げる。(16) は中部ドイツ語の例で，(17) は上部ドイツ語における例である。

(16) 〈kuntlichen〉
〈genczlich〉
〈nemelichen〉
〈offenlichen〉
(17) 〈kuntlich〉
〈genczlich〉
〈heimeliche〉
〈sunderlich〉

中部ドイツ語においても，また上部ドイツ語においても同様に，-lich 接尾辞の前の音節

は，それ自体に強勢がない場合は軽音節と重音節，強勢がある場合は重音節のみ[18] が許容されている。

また同時に -lich に先行する音節の語（音節）末音硬化についても観察することができるが，中部ドイツ語においても上部ドイツ語においても同様に現われ方にゆれがあり，両者の違いを確証する手がかりとはなりえない。

3. 3. 中部ドイツ語の〈t〉挿入の有標性

ここで，-lich 派生語以外の語に現れる，鼻音と側面音間の挿入現象を考慮に入れて中部ドイツ語の〈t〉の挿入と上部ドイツ語の〈d〉の挿入の違いを検証してみよう。

そもそも上部ドイツ語の〈d〉の挿入は，-lich 派生語の場合はバイエルン方言に限られてはいるものの，接尾辞 -el[19] や縮小接尾辞 -lein による派生語にも生じている。その例として V. Moser が挙げた例のいくつかをここで見てみよう。これらのうち (18) の〈spindel〉と〈quendel〉は現代ドイツ語においても萌芽子音［d］の入った形，‚Quendel' と ‚Spindel' が残されている。また (19) -lein 派生の 2 語は頻繁に用いられていた。

(18)	〈andel, endel〉	(＜mhd. ‚enel')
	〈kandel〉	(＜mhd. ‚kannel')
	〈spindel〉	(＜mhd. ‚spinnel')
	〈quendel〉	(＜mhd. ‚quēnel')
(19)	〈fendlein〉	(＜mhd. ‚venelîn')
	〈mendlein〉	(＜mhd. ‚mennelîn')

これらの接尾辞，-lich，-el，-lein には先行音節の〈n〉と〈l〉の連続を生み出す可能性がある以外に，特に意味的な類似性は持たない。つまり，上部ドイツ語に頻繁に現れる〈d〉の挿入は，派生語の構成に関係なく，鼻音と側面音の子音連続という条件下で起きている。

これに対して中部ドイツ語の発達である〈t〉の挿入は -lich 派生語に限られている。例えば，中高ドイツ語の，弱音節 -en と接尾辞 -lich が接合する ‚nefenlîn' や ‚wagenlîn'，‚gegenlîn'，‚eigenlîn'，‚îsenlîn'，‚kürsenlîn' などの語が，初期新高ドイツ語時代の中部ドイツ語において〈t〉や〈d〉の挿入が生じたという報告はない。上部ドイツ語の〈d〉挿入の場合と比べると，中部ドイツ語の〈t〉の挿入は，現れる場所が非常に限定されている。

また，3. 1. で述べたような［n］と側面音［l］の間の［t］挿入の調音過程において，先行の子音が唇音の［m］であれば，同調音点の破裂音［b］が生じるが，この［b］の挿入子

18) 強勢アクセントを持つ言語においては強勢のある音節は 2 モーラ（重音節）が好まれるのが普遍的な傾向である（Vennemann, Theo (1988): Preference laws for syllable structure and the explanation of sound change. Berlin: Mouton de Gruyter の 30 頁を参照）。

19) この接尾辞の母音〈e〉の脱落によって語幹末の〈n〉と接尾辞の〈l〉の子音連続が形成される。

音も初期新高ドイツ語における音変化の一つとして現れる。この場合においても〈b〉として挿入される子音は，上部ドイツ語の〈d〉の挿入の場合と同様に，強勢のある音節の直後にのみ見られる。

(20) 〈nemblich〉 (＜mhd. ‚nemlich‘)
〈heimblich〉 (＜mhd. ‚heimlich‘)
〈(vn-)zi(e)mblich〉 (＜mhd. ‚zimlich‘)

また，この鼻音〈m〉と -lich 間の〈b〉の挿入は，上部ドイツ語における〈d〉の挿入のように，その出現範囲は -lich による派生語に限定されない[20]。

これらの現象をまとめると，上部ドイツ語の〈d〉挿入は，〈m〉と -lich 間の〈b〉の挿入現象に平行して，語の構成とはほぼ無関係に現れる。そして強勢音節末の鼻音〈n〉と側面音の連続という条件のみに従っているので，調音上の理由から発生した可能性が非常に高い。特に，強勢音節と接尾辞 -lich が隣接するということは，第1アクセントと第2アクセントが隣接することを意味している。このような状況は強勢アクセントを持つ言語において韻律的に弱強・強弱形を成立させにくいことが考えられる。つまり，3. 1. で述べた，挿入子音のための「すきま」が，この強勢音節と -lich の間にある方が安定するということになる。このことを考慮に入れると，子音の挿入は強勢音節が先行する位置に生じるのが自然と思われる。従って上部ドイツ語の強勢音節後の〈d〉挿入は音韻的な挿入現象としてはごく一般的で，無標であると言ってよいだろう。それに対して中部ドイツ語の〈t〉挿入は，-lich による派生語にその出現が限られていて，かつ弱音節が先行するという条件において他に類を見ない。つまり上部ドイツ語の〈d〉挿入やそのほかの同種の挿入現象からその性質において非常に独立した現象である。このように考えると，中部ドイツ語の〈t〉萌芽子音は，単純に子音連続における調音上の経過音とは捉えにくい。

4. 中部ドイツ語の〈t〉挿入と類推の可能性

第3章で検証したように，中部ドイツ語の挿入は調音的な理由で生じた可能性が低いとなると，次に考えなくてはならないのは意味上または形態上の類推の関与である。

V. Moser の，中部ドイツ語の〈t〉挿入についての単語別の記述によると，最初に文字上に現れるようになったのは14世紀前半，中部ドイツ語，〈eigentlich〉で，その後〈offentlich〉や〈ordentlich〉，〈wochentlich〉，〈freuentlich〉などの名詞と形容詞から派生した語が相次いで16世紀半ばまでに現れ始める。次に〈wissentlich〉や〈wesentlich〉，〈treffentlich〉などの

20) V. Moser では〈himblisch〉や〈(ver-)samblen〉などが例として挙げられている。特にこれらの例は語幹内での鼻音と側面音の連続の中に挿入が生じているので，形態的な，あるいは意味的な類推によるものではなく，調音的な理由から生じた現象であることが分かる。

ような，不定詞やそれの名詞化からの派生語が 15 世紀の初めから出現するようになり，過去分詞から派生した，〈vollkommentlich〉，〈bescheidentlich〉，〈vermessentlich〉などは，最も遅く，16 世紀後半にようやく，数は少ないが，出現するようになる。このように，派生構造によって子音の挿入が生じる時期に差が出るということは，やはり -lich 派生語内での語彙の種類が子音挿入の現われ方に影響を与えていると考えてよいだろう。もし，これらの中部ドイツ語の子音挿入が調音上の理由によるものであるなら，少なくとも発生当初は，語彙の種類を問わず出現するはずである。

V. Moser は，不定詞やそれの名詞化から派生した -lich 派生語における歯茎音挿入の原因として接尾辞 -ent ないしは -end への二次的な歩み寄りを想定している。つまり彼は，これらの語彙の挿入子音について，動詞の不定形と現在分詞の語尾の関係から類推が働いて生じたものと考えている。H. Paul (1959: S. 327)[21] も，すでに中世ドイツ語において，wiʒʒentlîch‘ が ‚wiʒʒenlîch‘ と並行して現れていたことから，現在分詞形に対する類推を〈t〉挿入の原因と捉えている。

このように中部ドイツ語の〈t〉の挿入の起源を，中高ドイツ語における ‚wiʒʒentlîch‘ や ‚wēsentlich‘ などの語の現在分詞語尾への類推による派生に求めることは妥当であると思われるが，一つ問題が残る。V. Moser の記述には〈wissentlich〉が初期新高ドイツ語において現れ始めたのは 15 世紀の初めであり，〈eigentlich〉は〈t〉の挿入が見られるようになった最初の語で，14 世紀の前半に現れ始めた，とある。この記述をもとに考えると，〈eigentlich〉を筆頭に広まっていった中部ドイツ語の一連の〈t〉の挿入現象と中高ドイツ語における，wizzentlîch‘ の出現に時期的な隔たりがあることを見過ごすわけにはいかない。

また，〈t〉の挿入が最初に行われるのが形容詞・名詞派生語であっても不定詞からの派生語であっても，過去分詞からの -lich 派生語にはそれらの派生語にかなり遅れて挿入が現れ始めたことから，現在分詞への類推の次に，全ての〈-en〉＋-lich 接続に〈t〉が挿入されるという規則化の段階を経ていることが推測される。

5. まとめ

現代ドイツ語に見られる接尾辞 -lich の前に生ずる萌芽子音 [t] は特定の子音連続間における調音上の経過音，わたり音であると見なされていることが多いが，しかし，以上のように，初期新高ドイツ語における -lich 派生語の歯茎音挿入を考察し，また複数の，同様の挿入現象を比較してそれぞれの特質を明確にしていくことで，その現代ドイツ語の [t] 挿入の前身である中部ドイツ語の〈t〉挿入は調音上の変化としては有標であることが見えてきた。すなわち，調音上の経過音としての現代ドイツ語の [t] の挿入の解釈は疑問視されるべきであり，V. Moser や H. Paul の，現在分詞語尾への類推の方が，挿入原因である可能

21) Paul, Hermann (1959[6]): Deutsche Grammatik. Band I, Teil I: Geschichtliche Einleitung, Teil II: Lautlehre. Halle: Niemeyer.

性が高い。しかしこの解釈もまた問題を残すものであり，さらに類推において複数の段階を持つ，複雑な背景があることを念頭においた研究を進める必要があるだろう。

Vom Ursprung des epenthetischen dentalen Plosivs bei Derivativa mit dem Suffix „-lich“

KUBO Sayaka

Im gegenwärtigen Deutsch findet sich das epenthetische [t] oft zwischen dem [n] und dem Suffix „-lich“, wie in ‚eigentlich‘ und ‚hoffentlich‘. Dieser Konsonant wird als ‚Gleitlaut‘ bzw. ‚Sproßkonsonant‘ bezeichnet und im allgemeinen als ein zur Erleichterung der Aussprache zwischen zwei bestimmte Konsonanten eingeschobener Laut erklärt. Hier beschränkt sich aber die Erscheinung der Epenthesis auf die Wörter, in denen eine unbetonte Silbe unmittelbar dem Suffix vorangeht. Daher ist zu vermuten, daß außer dem Faktor der Kombination des Nasals und des Laterals auch die Stelle der Akzente im Wort auf die Epenthesis Bezug hat. Aber es besteht die Möglichkeit, daß dies keine phonetische Ursache hat, sondern durch morphologische bzw. semantische Analogie bewirkt wurde.

Nach V. Moser stammt das epenthetische [t] vor dem Suffix „-lich“ aus dem Mitteldeutschen. Es trat gelegentlich schon im Mittelhochdeutschen auf; häufiger seit dem 14. und 15. Jahrhundert; danach verbreitete es sich auch im Oberdeutschen. Besonders fällt auf, daß fast zur gleichen Zeit der Einschub des ⟨d⟩ zwischen dem ⟨n⟩ der betonten Silbe und dem ⟨l⟩ (bei den „-lich“-Derivativa fast nur im Bairischen) im Gegensatz zum Mitteldeutschen im Oberdeutschen entstanden ist. Danach ging der oberdeutsche Einschub des ⟨d⟩ zurück, während der mitteldeutsche des ⟨t⟩ bis zur Gegenwart bestehen blieb.

Kann man die beiden Erscheinungen des Einschubs als Beispiele für eine aus rein phonetischen Gründen entstandene Lautveränderung ansehen? Die Epenthesis zwischen dem Nasal und dem Lateral findet in folgender Weise statt: In der zweiten Hälfte des nasalen Artikulationsvorgangs wird der darauf folgende Lateral vorbereitet, bei dem der Luftstrom in die Mundhöhle fließt. Dabei werden die beiden betreffenden Sprechorgane (Zunge, Zahndamm) getrennt, was man dann als ein Plosiv hört. Der Entstehung des Sproßkonsonanten muß meiner Meinung nach die Silbenstruktur zugrunde liegen, die einer Öffnung zwischen dem Nasal und dem Lateral Raum gibt. Dieser strukturelle Unterschied zwischen dem Mitteldeutschen und dem Oberdeutschen ist aber nicht schriftlich fixiert. Dagegen wird unter Berücksichtigung anderer Epenthesen zwischen ähnlichen Konsonantenfolgen die unterschiedliche Beschaffenheit des mitteldeutschen und oberdeutschen Einschubs klar: Erstens findet man vergleichbare Erscheinungen wie den oberdeutschen Einschub von ⟨d⟩ in anderen Umgebungen.

Zweitens: Außer dem Fall des mitteldeutschen Einschubs von ⟨t⟩ tritt kein Sproßkonsonant nach einer unbetonten Silbe auf. Aus diesen Gründen können wir annehmen, daß der mitteldeutsche Einschub im Vergleich mit dem oberdeutschen eine markierte Erscheinung ist.

In diesem Fall wäre eine andere Möglichkeit in Betracht zu ziehen, nämlich die einer morphologischen bzw. semantischen Analogie als Ursache des mitteldeutschen Einschubs. Nach der Untersuchung von V. Moser trat dieser bei den vom Partizip Perfekt abgeleiteten Wörtern erst im 16. Jahrhundert auf, also viel später als bei den vom Adjektiv oder vom Substantiv abgeleiteten. Dieser entschiedene zeitliche Unterschied des Auftretens legt es nahe, die Ursache für die Entstehung des mitteldeutschen Einschubkonsonanten ⟨t⟩ in Wortbildung durch Analogie zu sehen.

Wie diese Untersuchung von Einschub-Erscheinungen im Frühneuhochdeutschen zeigt, ist es durchaus die Frage, ob die Epenthesis von [t] bei den „-lich"-Derivativa im gegenwärtigen Deutsch aus artikulatorischen Gründen entstanden ist.